

HIMALAYA

ヒマラヤ

No. 337



1999 DECEMBER



日本ヒマラヤ協会
THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

2000年H A Jサマー・キャンプ隊員募集

カラコルム スパンティーク (7,027m)

スパンティークは、チョゴルンマ氷河の源頭に位置する名峰である。南には、マルビティンやハラモシュ、北にグレート・カラコルムの山々を望むことが出来る。カラコルムの展望台でもある。

H A Jでは、サマー・キャンプの新舞台としてパキスタンを選んだ。その第一歩としてスパンティークにて開催する。

パキスタンの登山は、スカルドへのフライトや、ポータートラブルなど、短期間登山にとっては、幾つかの問題があるが、情報の収集や強力なスタッフの配置、隊員の積極的な参加によって対処して成功に結びつけたい。

尚、パキスタン登山の申請は、年内に行わなければならないので、希望者は早目の申込みを協力をお願いしたい。

記

1. 期間：2000年7月14日(金)～8月28日(日)
2. 募集人員：10名程度

3. 負担金：75万円
4. 資格：冬山の尾根を20kg程度の荷物を持って行動できる人。
5. 申込〆切：10月31日(定員になり次第〆切)
6. その他：H A Jの登山隊は、「ガイド公募登山」ではありません。準備活動に参加、合宿に参加の義務があります。



▲左の稜が南東稜

表紙写真

ラサの北西120キロにあるチョム・カンリはニェンチェンタンラ山群第2の高峰である。周囲は4,800mの高地で草原が広がる。これはBCから西面を撮ったもの。連日降雪に悩まされ苦しい登攀だった。それでも悪天のなか3名が第3登に成功した。初登(秋)第2登(春)から比較すると、我々の登頂の時は遥かに積雪が多かった。(関根幸次)

ヒマラヤ No.337

1. H A Jサマーキャンプ

チョム・カンリ南壁第3登報告

同登山隊

14. ヒマラヤ・ニュース

〈地域ニュース・ヒマラヤから・Books・インフォメーション・トピックス〉

18. 2000年H A Jサマー・キャンプ隊員募集

19. 四川省、青海省、雲南省和文参考資料

24. 寸感・事務局日誌

チョム・カンリ南壁第3登報告

——女神の山は微笑まず、連日悪天の苦しい登攀



はじめに

2年つづけてラサ入りすることになり、その変貌に驚いた。来年は……と想像することも難しいほどだ。歴史の名残をとどめる古い柳の木は、道路拡張のために無惨にも切られてしまい、古いチベット民家は取り壊されて新しい家が建っている。ラサの発展という美名のもとに中国最大の観光地となってしまうのだろうか。

チョム・カンリ峰はラサの北西、ニェンチェン・タンラ山群の第二の高峰である。1996年秋に中国・韓国の合同隊により南稜から初登された。翌1997年春に日本・中央大学隊が第2登、今回の我々H A J隊の快挙は第3登になる。

チョム・カンリというのは一般名であるが、地元チベットの人たちは〈チョム・カンガー〉と呼んでいる。チョム・カンガーは古くからチベット人の守り神で「女神の峰」または「知恵の目」とも呼ばれている。村人は毎朝小さな枝木を燃やし、

▲チョム・カンリとダブラ (6,564m)

天高く舞い上がる煙をみてチョム・カンガーに向かってお祈りをする。麓から敬虔な祈りを捧げる地元民にたいして、我々登山隊員はたいして信仰心も持たずに登ってしまう。俗にいう〈神の崇り〉はないのだろうか、と疑ってしまう。

信仰心を糧に自然と共に生きる彼らの姿に深い感動すら覚える。夜が明け切らぬうちに家畜と共に放牧に出掛け、日がおち暗くなって我が家に戻る生活である。皮の〈きんちゃく袋〉にツァンパ(麦こがし)を入れて、それを食べながら家畜と共に標高4800m～5300mの高地に生える草を求めて移動する日々を送っている。

我々はラサから青藏公路を2台のランクルと1台のトラックで羊八井(ヤンパーチン)に向かった。雨季のため道路が土砂崩れで通行困難な箇所もあったが、夕方早めに着くことができた。

羊八井は標高4200mの広々とした高原で、地熱

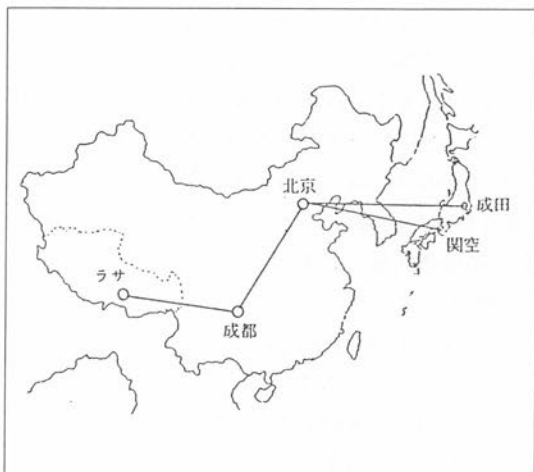
発電所がある。我々は招待所に泊まるということで、一瞬去年のランカーズの招待所を思いだした。しかし利用者が少ないのか寝具をはじめ周辺も意外と清潔でホッとした。

招待所からニエンチェン・タンラ山群や目指すチョム・カンリなどを真近にみる事ができる。羊八井は地熱発電の温水を利用して室内プール・屋外温水プール・シャワーがあり、レストランや売店もあり水着も売っている。

今年のサマーキャンプは昨年と同様モンスーンの最中にあたり連日雨・雪にたたられた。8月5日にC1(5950m)設営、早い段階でアタック可能……と計算した。しかしその後天候が悪化し、C2へのルートが思うように伸びず、やっと8月15日に設営できた。A隊の佐藤副隊長、武部・川崎隊員の3名が視界50mのなかアタックに向かい、何とか登頂に成功した。B隊の関根、石川登攀隊長、岩瀬・鈴木隊員は雪崩の危険と悪天のために涙をのんでアタック中止とした。

去年のニンチン・カンサの時もB隊は悪天でアタックを断念している。特に関根・岩瀬は昨年引き続き登頂のチャンス逃し、真に心残りである。しかし幸いにも登山活動中ラサに下山する隊員はなく、全員無事に帰国できたのもチョム・カンリ〈女神の峰〉が優しく見守ってくれたおかげと思う。

最後にHAJの皆様をはじめご支援いただいた方々、快く賛同くださいました各位に厚く御礼申し上げます。



▲ラサまでの行程

1999年9月

チョム・カンリ登山隊・隊長 関根幸次

登山隊の概要

1. 目標の山

中華人民共和国、チベット自治区

チョム・カンリ(中国名:穿母崗日・7048m)

2. 登山期間

1999年7月20日～8月25日(35日間)

3. 登山の目的

1) ジョム氷河より南壁から登頂

2) テイクイン、テイクアウト

4. 結果

1) 8月15日 3名登頂、二次隊は雪崩の発生と悪天のため中止

2) 隊として持ち込んだ物はほとんど回収し処分した。Fixロープ下部のみおろした。燃やせないものはラサで処分。

5. 隊の構成

隊長	関根幸次(65才)	埼玉	総括
副隊長	佐藤英樹(51才)	北海道	装備
登攀隊長	石川龍彦(47才)	奈良	医療
	武部秀夫(46才)	岡山	無線・装備
	鶴巻陽一(41才)	兵庫	装備
	川崎浩史(35才)	埼玉	食糧
	岩瀬雄二(34才)	東京	環境
	鈴木一己(20才)	神奈川	食糧
			中国側スタッフ
連絡官	劉 峰		通訳 趙伶俐
	コック		曾

東京からチベット・ラサへ

7月20日 とうとうこの日がきてしまった。私自身、久しぶりに海外へ行くので良い緊張感だ。HAJルームに10時に集合して荷物を持って箱崎へと向う。箱崎でコーヒーなどを飲み、少し休み12時のバスに乗る。見送りに関根さんの息子、岩瀬さんの彼女、私の友人3人が来てくれていた。みんなに別れをつけ成田空港に向う。道路がすいていたので、定刻通り到着し昼食をとり時間があまっていたので空港見学をして出発ロビーへ向かう。飛行機は中国国際航空926便14時55分定刻通りの

出発。離陸するときは何ともいえない気分であった。忙しい準備や日本の生活から開放され、やっとヒマラヤに行けると思うと、気分が高まってくる。約3時間の飛行で中国、北京になってしまう。空港で中国人スタッフに向えられ、ホテルに向う。北京も暑く蒸すため、じっとしていても汗をかく。夕食をすませ、関空からくる3人をまつ。北京を散歩したりしながらヒマをつぶしていると9時30分頃、関西組が到着しこれで全員集合となった。打合せをしてねる。

7月21日 朝はゆっくり起きて朝食をとる。この日は成都に向かう。どこの航空会社かわからずドキドキするが、四川航空だとわかる。落ちないかな?と、ドキドキするが最新のA320機を使っていてビックリだ。成都へは2時間30分で到着し、ここでは今回の連絡官と合流する。成都では新しい高速道路ができていて、車ですぐホテルにつく。少し休んだあと、寺やデパートの見学をして個々に楽しんでいた。本屋にいき、山森さんから紹介のあった中国の地図を購入した。食事は成都の暑さに加えて、四川料理の為辛く、みんな汗をかきながら食べるがうまくて最高である。食後はまた成都の街を散策したり、ホテルにもどったりと自由に個人で楽しんでいた。

7月22日 朝早く成都を出て、ラサに向かう。朝から少しどこか緊張感みだが、みんなワクワクしている。朝早い為、少し体がだるくねむいが、中国西南航空4403便で6時40分に成都を出発する。飛行機の中では、みんな疲れている様子で寝て過ごすが、途中左方向に雪山が多々見えてきた。ほとんどが雲におおわれていた為、何の山かまではわからなかった。しかし私は初めて見るヒマラヤにただ感動していた。座席が真中だったため、窓側に移動して長い間見ていた。これからあのような山に登ると思うと気分が高まってきて、気合いが入ってくる。時計ではかった高度計で、1500m位にたもたれていた気圧が、飛行機が高度をさげていくにつれて、機内の気圧は上がり、3700m位の気圧に調整してくれて、少し耳が変になるが無事着陸する。ラサの飛行場は曇りであったが、飛行機から階段をおりみんなで握手をかわし、記念撮影をした後、荷物を空港でうけとる。まだラサ

3650mの標高である事は感じない。空気の薄さもこの時は感じないが、各自気をつけながら歩いているようであった。荷物をトラックにのせて隊員はマイクロバスに乗り、100km近い道のりを走りラサ市街へと向かった。途中ヤルツァンポー川が右側に見えてくるが、雲が多くあまり近くの山々を望める事はなかった。雨が今にもふってくるような天候でがっかりするが登山期間中、天候にめぐまれて、登れるよう願いながらラサ市街のホテルに到着した。 (記 鈴木)

関西パーティ (石川・武部・鶴巻)

関西国際空港～北京

7月20日 CA922便で13:35に関空を出発。曇り空。17:50(日本時間)に上海着。ここで入国審査を済ませる。後は長い待ち時間。次にCA922便が北京へ向けて離陸したのは18:35(ここより現地時間、日本より1時間早くなる)だった。直行便なら楽で良かったのと思う。北京空港へ到着したのは20:15。もうすっかり夜。迎えに来てくれていた中国登山協会の人達の案内で一路ホテルへ向かう。立派な高速道路を我が日本車トヨタのランクルで飛ばす。21:40目的地の前門飯店へ到着。

今回、奈良・岡山・兵庫在住のそれぞれ石川・武部・鶴巻の関西3人組が揃ったことで、東京組とは違った関空発の別便で北京へ入ることが可能となった。新幹線等で東京へわざわざ出掛け、成田から全メンバー同一機で飛び立つよりも、時間的・金銭的にこちらの方が我々には有り難かった。又、空港まで家族が見送り(帰国時には出迎え)に来やすかったのも良かった。現地での確実な集合、片方のグループに何かトラブルが発生したと



▲ラサでの準備

きの連絡方法の確保など、若干の不安が無かったわけではないが、我々3人は問題なく北京のホテルで東京組の5人と無事合流することが出来た。(ただし、東京組の方が早く着き過ぎ、時間を持て余し気味だったが…) (記 鶴巻)

ラサから羊八井(ヤンパーチン)

7月23日 体調の悪い鶴巻をホテルに残し7人でチベット登山協会に行く。午前中はデポ品のチェック、午後は食料などの買い出しをやる。ポタラ宮東の市場は種類、量とも豊富で驚かされる。

7月24日 今年チベットは雨が多い。午前中、小雨の残る中、ラサの町の南側の小山に順化に出かける。4100mのタルチョのある所まで往復する。午後は町の中をぶらつく。一昨年、来たときにはなかった登山用品店まである。便利になるのはありがたいが秘境が消えていくのは複雑な気持ちだ。

7月25日 荷物はトラックで、我々はマイクロバスで羊八井にむかって出発。川に沿った道を2時

▼羊八井の温水プール



間ほど北上すると羊八井の部落に到着。数軒の食堂や売店が並ぶ小さな町だ。軍隊の兵舎もある。ホテルがないので町から少し離れた所にある地熱発電所の招待所に泊まる。素泊り1泊につき3.5ドル。ベットがあるだけで水もない。

7月26日 羊八井の町の北東側の小山を4800m付近までゆっくりと登る。雲が多く遠くの山々はあまり見えないがゴルムド方面に続く道が北へ伸びている。木はほとんどなくエーデルワイスをはじめ高山植物がたくさん咲いていて気持ちのよいところだ。午後、発電所のそばの温水プールで泳ぐ。4400mの標高なので激しい動きをすると苦しいが本当の温泉なので気分は最高だ。この日の夕方、西方はるかかなたにチョム・カンリが姿を見せた。感動!!

7月27日 朝、久々の好天でニェンチェン・タンラの主峰などもよく見える。マイクロバスに乗り5350mのスゲラまで順化に向かう。いよいよ登りという手前で橋がこわれておりそこからは歩き出すがちょうどチベット人たちを乗せたトラックが通りがかったので同乗させてもらう。峠まで8人で50元請求される。トラックはあえぎながら登っていく。峠につくとチベット人たちは歓声をあげ空に向かって米を撒いた。目の前に雪をまとったチョム・カンリが圧倒的な迫力で見える。帰りはマイクロバスの所までひたすら歩いて下った。

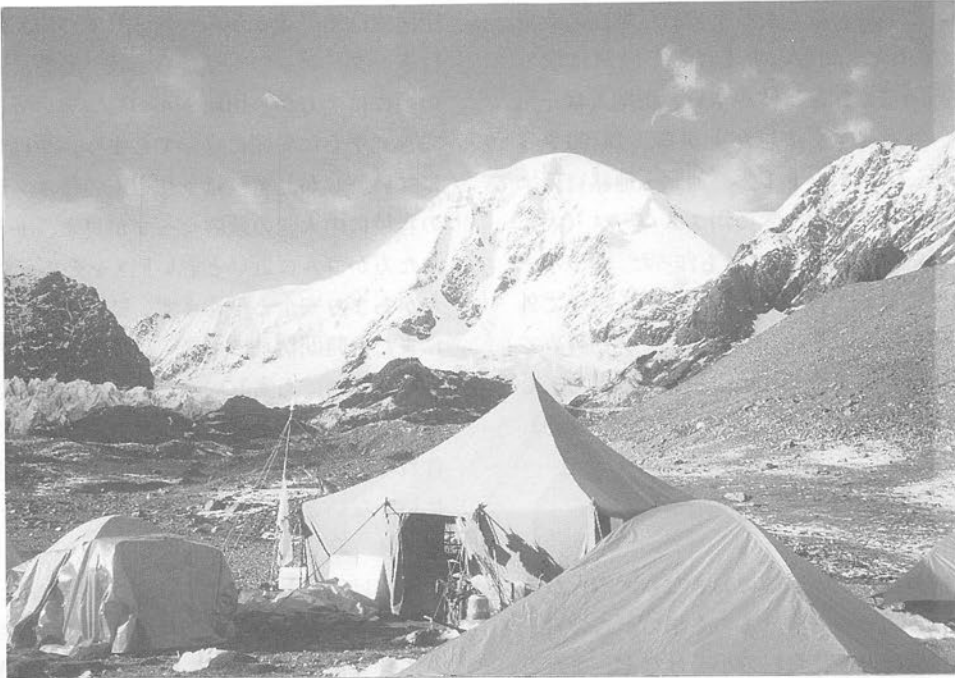
(記 石川)

BC建設

7月28日 7:00起床。天気曇。7:30高度順化のために3泊した宿を後にする。街の食堂で朝食を済



▼BCからのチョム・カンリ



ませて、8:32隊荷を乗せたトラックが先に街を出てス・ゲラ峠へ向かう。我々はトヨタ製のマイクロバスで後を追う。9:52壊れた橋の横の川の流れてマイクロバスで突破。日本車の優秀さを再確認する。10:09ス・ゲラ峠を通過。11:02峠を降りて最初の村に立ち寄る。しかし、ここでは川を車で渡れないので本道に戻って先を急ぐ。しばらくすると、進行方向右手の川の向こう岸に大きな次の集落が見えてくる。立派な橋も見える。あそこが仮BCを設営する村に違いないと一同意見が一致する。11:40無事橋を渡り、目的地の村に着く。すぐにたくさんの村人が集まってくる。珍しそうに我々のトラックやマイクロバスの周りを取り囲む。皆、比較的綺麗でちゃんとした服装をしている。豊かな村なのであろう。大きな学校も少し先に見える。ドライバーの王^{おう}さん（こんな字を書くのだろうか？）がチベット語を話せるので交渉が比較的スムーズに進む。結局、初登頂した韓国・中国合同隊や中央大隊はもう少し村を過ぎた奥に仮BCを設けたようだが、モンスーンで地面がぬかるんでいる今の時期は車でこれ以上の前進は無理と判断、橋を渡り返した草原に我々の仮BCを設営する。村人がずいぶん手伝ってくれた。14:00過ぎ、設営完了。ここは標高4715m地点。残念

ながらチョム・カンガ（村人達はこう発音している）は雲の中である。

7月29日 今日BC設営予定地点まで偵察に行く。天気が悪いのでプラブーツ・スパッツ・雨具上下を着用。隊長の関根さんと武部さんを留守番に他のメンバー6人で8:00過ぎに出発。11:00過ぎにBC設営予定地点の5350m付近に到着。道は川沿いに踏み跡がはっきりしていて歩きやすかった。雨は途中で止む。日が差すとTシャツ1枚でもOKなぐらいの暖かさ、しかし、日が陰り、風が吹くと途端に寒くなる。こまめなレイヤードが必要である。ここからは我々が登るアイスフォールやC1へのルートもよく見える。雪崩の危険な場所が多そうである。14:10頃ずいぶん方々を歩き回り、韓国・中国合同隊がBC設営した同じ場所に我々もBCを構えようという結論になり下山。仮BCまで残り僅かなところで上がっていた雨がまた激しく降り出し、皆ずぶ濡れになって15:40頃帰還。

7月30日 昨日の雨は上がる。8:30先発隊の関根隊長・岩瀬・川崎・鶴巻が出発。後の荷を担いだ30頭のヤク隊が残りのメンバーと続く。ヤクの足は速く、先発隊にすぐ追いついてくる。11:20予定していたBC設営地点より50m程下の草原に着

く。およそ5300m地点。関根隊長が緑のある所の方が良い、と判断。ここを我々のBC地点に変更。12:30最後尾のヤク到着。すぐにBC設営に取り掛かる。高所での作業は体が辛い。現地人は元気であるが、我々はすぐに息が上がる。14:00やっと設営完了。メス TENT 1張、通訳・連絡官用エスペース（小）2張り、隊員用エスペース（大）3張り。もちろん立派なトイレも作った。プラパールの荷物はまとめて青ビニールシートを掛けて外に置く。霰が少し降る。14:40山に入って初めて雷が鳴る。いよいよ、これからが登山本番である。心引き締めて行こう。（記 鶴巻）

登山活動スタート

7/31 BC開き

BC最初の夜だというのにいきなり大雪となる。しかし気温が高いので溶けるのも早い。この日、午前中全装備の点検、食料の小分けなど。まだこの高度に完全順応してないらしく、立っているだけで辛いときもあるが、BC入りして2日間寝たきりだった昨年と比べると雲泥の差だ。やはり経験は積むものだ。昼食の隊長が作ってくれた冷し中華のうまいことと叫びたい。午後、BC開きのセレモニー。夕方、有志によりアイスフォール付近までの偵察。候補と見られていた中央部のスベリ台（中・韓合同隊）ルートよりやはり右側の中大ルートの方が良いのでは、などと話し合う。

8/1 BC〜ルート工作（プラトーまで）

朝、一面のガスだったが出発の頃には晴れてきた。前日の打ち合わせ通り、アイスフォールの右端を登る。ガレ場に雪がついてアイゼンをつけても崩れて歩みにくい。困難が予想されたアイスフォール上段の手前からヒドンクレパスを警戒してアンザイレンする。傾斜の出たあたりから2P川崎さんの巧みなルートファインディングでFIXを伸ばすが、プラトー直前の難関「4mの垂直の氷壁」で苦闘し、大きなタイムロスとなった。その先リードを岩瀬に交替、クレパス帯を2P伸ばしたところ、ターシャの登りに入る前に時間切れとなり、荷を全てそこにデポして下降。

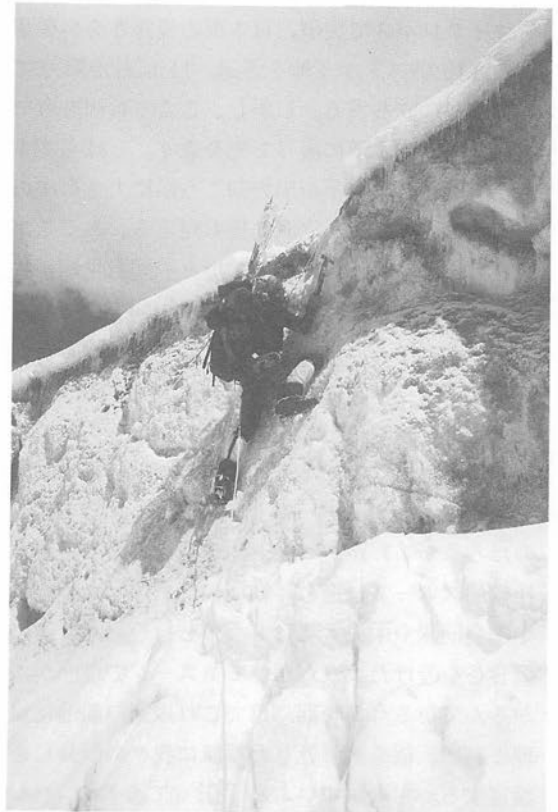
8/2 BC→ルート工作（5850mまで）

絶好の天気。昨日氷壁で奮戦した川崎さんに替

わり若手の鈴木が先発となる。先発はデポ地まで空荷で行く。そこから一人2PずつFIXを張って行き、ターシャの雪壁から雪稜へ順調に開拓。その頃には後方から川崎さんが凄い勢いで追いついてきてすぐに先頭に立ってしまう。やはり只者ではない。しかし雪稜は予想以上の長さ。途中、左の岩稜に中大隊の残置ロープが見え、トラバースした方がコルに近いと思いFIXをそちらへ伸ばしたがあまり安全とは言えず、結局コルに達する前にまたも時間切れで下降。後で話し合った結果、少し遠回りでも素直にターシャの頂上付近を回って行こうということになった。2日かけてC1が作れないとは全く予想外のことで、この山は簡単にいかないと、誰もが思い始めていたように思う。

8/3 BCにて休養

昨日は疲労したのでぐっすり眠れた。今日も天気良く、衣類を干したり小川で体や髪を洗ったり。せっかく時間があるからと昼食は豪華な冷し天ぷらそばを作る。ヒマラヤでの食事とは思えないうまさであった。午後にゴミ焼き。焼き終って



▲ 4 mの垂直の水

▼クレバス帯を行く



も灰の中からアルミ箔を取り出すのが結構大変。

8/4 BC→C1

お馴染みとなったコックの曾ちゃんの「ごはんですよ！」の声で今日も一日が始まった。光栄にもC1入りメンバーに選んで頂き、佐藤・川崎・岩瀬は個装を持って先発。3人で昨日の工作の続きをやるが、この雪稜は予想外に長く、コルへの下りもガスの中危険な下降を強いられ、C1予定地に全員が集まった時には既に夕方になっていた。C1メンバーはすぐにC1作りにかかり、隊長以下5名はFIXを辿って下降。やっとC1を整備し、明日に備えて明るいうちに床につく。私は夕食後気分が悪くなり、呼吸が変になってきた。昨年のニンチンC1より100m高いせいだろうか。いずれにせよまだまだ修業が足りない、と思った。

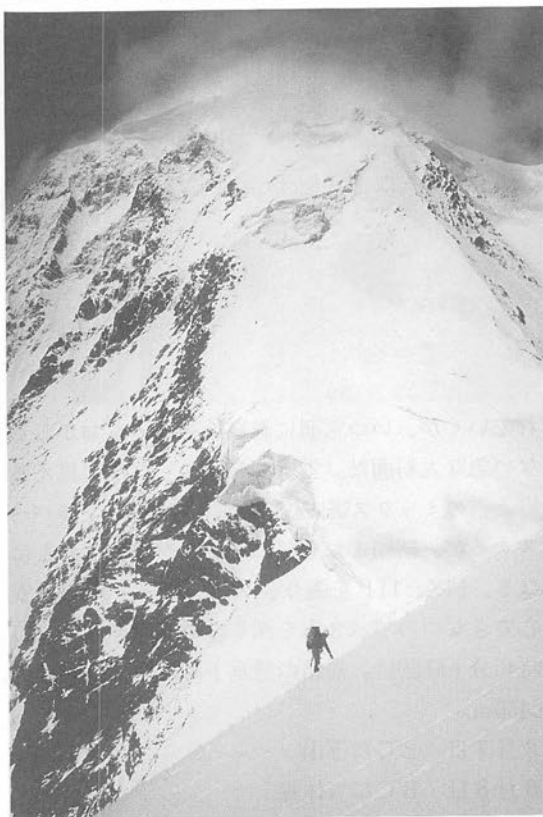
(記 岩瀬)

頂を目指して

C1～C2間 A隊の記録

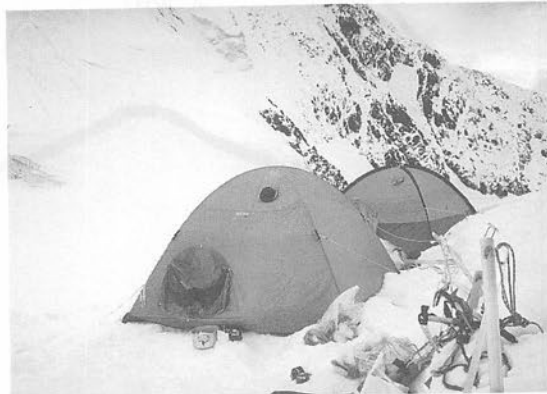
8月5日 7時30分、ガスが明け視界が出てからA隊(佐藤・川崎・岩瀬)がルート工作に出掛ける。広いコルまでは緩やかな下りで、斜面が少し急になってきてからヒドンクレバスを警戒してスタカットで行き、ロープをFIXし始める。最初のクレバスは左を巻き2つめは、クレバス内に下り、そして上がる。岩瀬は1Pで調子が悪くなりC1に戻る。デブリを左に見ながら、壁の基部まで8PロープをFIXする。C1に荷上げされていたロープはこれが総てなので、11時にはもうやることもなくなった。早々とC1に戻る。14時30分、スノートップに、B隊(隊長・石川・鶴巻・武部・鈴木)

▼ターシャへの登りとチョム・カンリ南壁



の荷上げの荷物を受け取りにいき、調子の悪い岩瀬さんが上がってきた武部さんと交替する。

8月6日 C1を7時に出発し昨日の最終地点(6150m)には8時過ぎに着いた、視界が悪くルートが不明だが、右端は雪底になっているようなのでとにかく直上するが、南稜というよりは南壁と言ったほうがぴったりするくらい広い急な雪壁が続く。途中、何度も急に吹雪始め、天気待ちを度々強いられるが、斜面が急なので降った雪はみな流



▲C1

▼C 2 へのルート工作に向う。後方にC 1

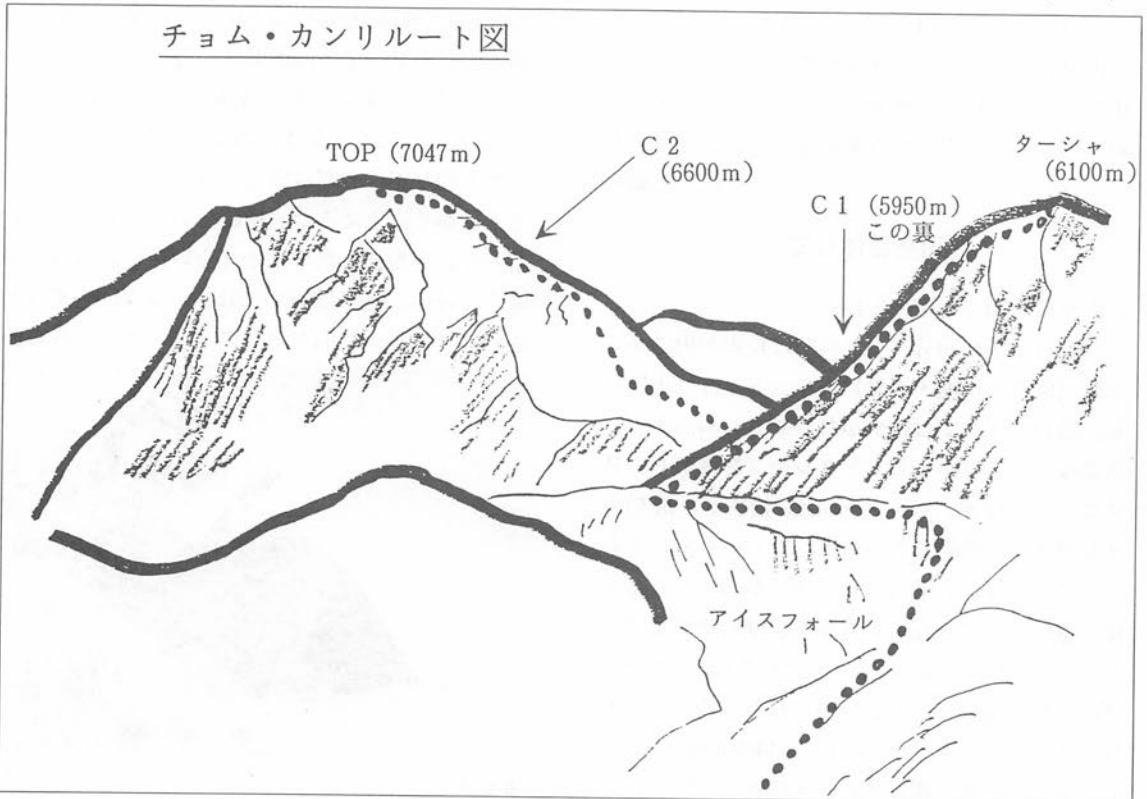


れていくが、いつ雪崩に巻き込まれてもおかしくない急な大斜面だ。雪壁9 P目から、左に見える岩と雪のミックステ帯に救いを求めて左上、トラバースするが、結局また雪壁にルートを求めることになる。FIX、11Pを張り、スノーバー1本では安心できないので、3本を深く埋め支点を作り、17時40分下降開始。帰路の懸垂下降は早い。到達点、6450m。

- 8月7日 BCに下山
- 8月8日 BCにて休養
- 8月9日 BCにて休養

- 8月10日 悪天のためC 1に上がれずBCにて休養
- 8月11日 FIXを掘り起こしながらC 1へ
(隊長・A隊 佐藤・武部・川崎)
- 8月12日 悪天のためC 1停滞
- 8月13日 悪天のため停滞するもFIX掘り起こしに出掛ける
- 8月14日 前夜も霰と強風。霰が降るパターンだと、次の日は行動できる。7時30分C 1出発。11時30分6日の最高到達点に着く。11日にFIXを掘り起こしながらC 1入りし、12日は吹雪で停滞。昨日13日も天気が悪く停滞したが、少しの回復をみて、13PのFIXを掘り起こしをしたのが効を奏して早く着いた。ルートは直上、岩と雪のミックステ帯。岩の上に雪が乗っかっているだけなので支点が不安定だ。絶対に落ちられない。ここがルートの核心かもしれない。5 P、FIXを延ばして下降。川崎さんが奮闘。曇ったり、晴れたり、吹雪いたり、視界が有ったり無かったり、いつもこんな調子だ。今夜はB隊もC 1に上がり全員が揃った。
- 8月15日 今日は何としてもC 2までルートを延ばし、アタック体制に入らねばならない。7時40

チョム・カンリルート図



▼C 2 へ向けて



分C 1をルートを作るべく先行し、13時30分、最高到達点に到着。今日は視界が今のところある。傾斜が緩み、前方に大きな岸壁が見える。2PちょっとでC 2 予定地の岩壁の基部に着くが、基部手前は急で、左側下にはクレバスがある。B隊(石川・岩瀬・鈴木)も上がってきた。韓国隊、中央大学隊もここをC 2にしたはずだ。痕跡はわずかにFIXロープが出ていただけだ。テン場の整地、設営を武部さん・B隊に任せ、川崎さんと佐藤はルート工作にかかる。テン場を左上し、2つの岩壁の間のルンゼ状を直上し広い稜線に上がり、さらに広い雪面にルートを延ばす。2P半のFIXを張り終え、懸垂下降。18時20分、C 2に戻るとB隊がC 1に戻っていった後だった。C 2は狭くテントの出入りは、張ったロープに自己確保をとっての出入りになる。結局C 1～C 2間は26Pと少しFIXを固定した。(記 佐藤)

悪天の中感激の登頂!

8月15日 午後2時過ぎ、アタック隊3名、サポー



▲C 2より西方をのぞむ

▼チョム・カンリ南壁の核心部



ト隊2名が岩壁基部のC 2地点に到着後、テントの設営を武部さんとサポート隊にまかせ、佐藤さんと上部ルート工作に向かう。ルートは中央大の報告通り2つの岩壁の間の急な雪壁を進む事にする。3Pルートを伸ばし、本日は終了として下降する。これで明日は万全の体勢でアタックできるだろう。

C 2に戻ると岩棚にテントが空中に少しはみだして設営され、中は狭く又、トイレに行くのもセルフが必要であり気持ちが悪くないが、明日はアタックだという嬉しさから気にもならず夜を向えた。

8月16日 8:30 出発 12:40 登頂 14:30
C 2着

傾いたテントで狭苦しい一夜を過ごし、朝外を見ると昨日とはうって変わって、いつも通りの風雪で視界は全く無い。とりあえず出発準備をすませ待機していると、上部の空が開けてきた為「これは必ず晴れる」と3人共勝手に思いこみ、そそくさと出発してしまう。

昨日の急雪壁3Pをいつも通りラッセルして登るのだが、こう毎回毎回、ルートを引いた後でもラッセルで登り返すと本当にうんざりするが今日で最後だと自分に言い聞かせながら我慢する。

昨日の終了点から多少傾斜が落ち、稜線に出た事は分かるが、天気は一向に回復する気配が無い。とりあえず、1Pスタカットで進むが、セカンドが登る頃には、トップと同じラッセルをこぐはめとなり、手間食ってしょうがない為、そこから先は私が軽身でラッセルし、後続が赤旗を打ちながらコンテで登る事にして、一気に頂上をたたみか

▼感激の頂上!



けようとしたのだが、実際はカタツムリのようなジワリンコ作戦となったようであり、又視界の無い風雪の7000mを何も考えず、いつ終わるか分からずただ、ただラッセルマシーンと化して登っていると何か本当に悟りでも開けそうである。

C1から関根隊長も心配して「明日もあるから無理しないように」と指示があったが武部さんの「明日は無いですわ」の一言で日本ヒマラヤ協会チョム・カンリ登山隊1999年の頂上アタックは今日で最初で最後かもしれないという気合いが入り、3人共最後の力をふりしぼって登り続けた。

いつしか右と左のスカイラインが、せばまってきた次第にその2本線の合流点が見えだし長かったチョム・カンリの頂上の近くにいることが分かる。山頂は目と鼻の先だろう、傾斜も無くなりやがて水平になる。「サクセス」全く視界は無いがここが頂上だ。間もなく武部さん、佐藤さんも到着。お互い抱き合い涙して感激の一瞬だ、本当に苦しかったが、登れてよかった。

何も見えない頂上の写真を写し合って、スタカットでゆっくりC2へ下降した。(記 川崎)

登頂記

佐藤英樹

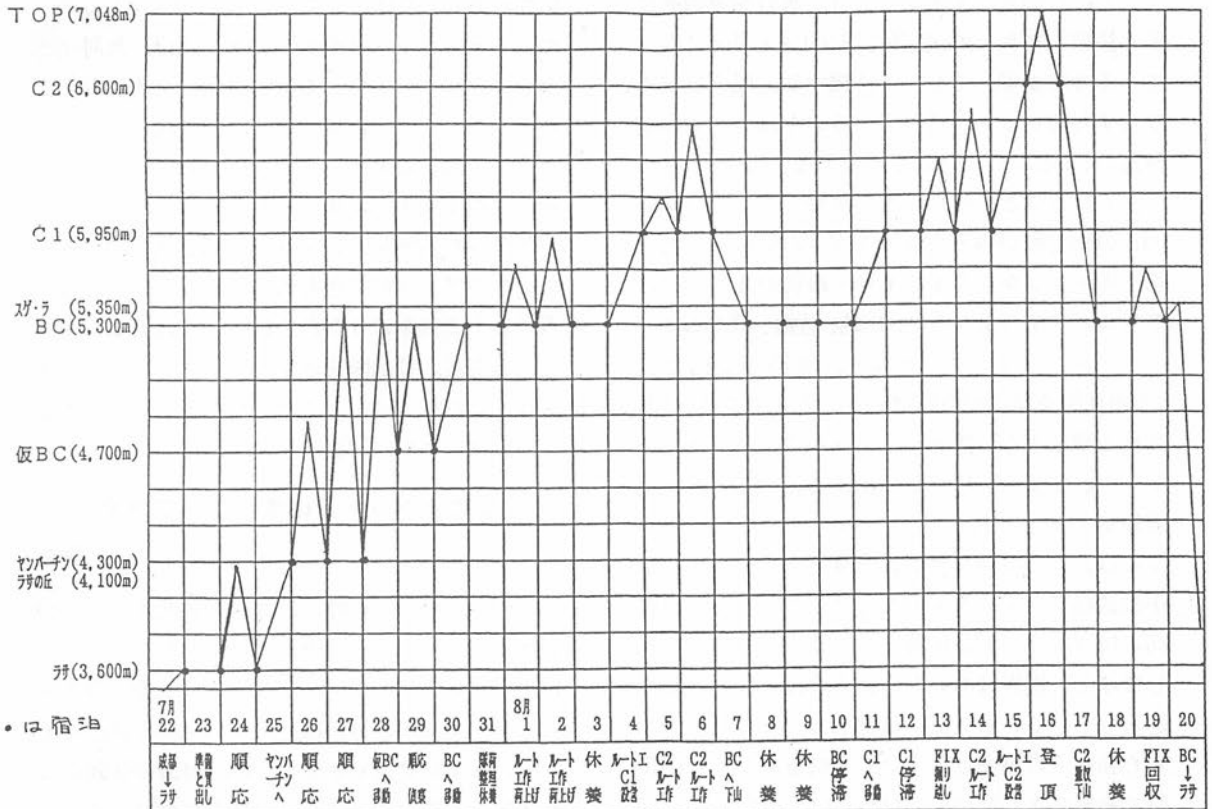
明るくなってから行動しようと、起床は5時半

になった。夜半からの吹雪がまだ続いていて、視界が悪く、C2の出発は天候待ちとなった。8時の気温はマイナス5度、そんなに寒くはないが稜線の風は強そうだ。3人の体調は、初めてC2(高度6600m)に泊まったにもかかわらず、ほとんど高度障害は出ていない。ルート工作で完全に順化したのだろう。川崎さんの咳は相変わらずだが、それでも武部さんと一緒にいつも煙草を吸っている。よく吸えるもんだと感心する。テントの外に出て、出発をためらいながら天候待ちをしている間、風を警戒して薄手の羽毛服をセーター代わりに着る。大きな空間に僅かに一瞬の光の隙間。「行ける、天気は良くなる、行こう。」8時30分過ぎC2を出発する。トレースは消えているが、昨日FIXした3Pで稜線に上がる。稜線は広い。風はさほど強くはないが、稜線もやはり視界は悪い。FIXをもう1P延ばすが、時間がかかるのでその後コンテで、ただただ高みを目指す。稜線に上がって少し傾斜は緩み、ラッセルも始めは大したことはなかったが、だんだんと膝くらいになってくる。小生は気温が少し上がり暑いので途中で羽毛服を脱いでしまった。少し暑さにやられたようだ。無線交信で、武部さんがC1にアタックしていることを告げると、「明日がある。決して無理をしな

いように。」と隊長の返答。しかし、2人の意志を確認すると、「行きましょう。」との返事。皆、明日だと体力的にも、また天候もどうなるか分からないから、今日のうちにけりをつけたいからだ。もちろん行けない天気ではない。川崎さんが「僕がラッセルします」とザックをデポし空身で登っていく。彼の頑張りには頭が下がる。視界は悪いが、左右の雪と空の境がだんだんと近づいてくるのが判る。傾斜も緩くなり、やがて長く・広い平らな一角に出た。先行した武部さん・川崎さんが何かを探しているような感じで歩き回り、それから手を握り合っている。それを見て、「ああ、ここが頂上台地なんだ。」と思うが、それが分かってもなかなか、二人に近づかない。苦しい。一步一步が苦しい。バテバテだ。「頂上です。外に高い処は無いです。間違いありません。韓国隊の登頂の写真と同じです。」小生を待っていた3人が言う。見渡すと、外に高いところはあるべくもなく、北側の境はスッパリ切れ落ちているのが判る。12時40分登頂。思ったより早く頂上に着い

た。晴れていればニンテン・カンサ、ニエンチェン・タンラ山群の展望は素晴らしかっただろうに残念だ。お互いの労をねぎらい、感謝の握手をする。自然と涙腺が緩む。過去何度か、初登頂を含め海外で頂上に立ち、それぞれそれなりの苦労があったが今まで涙が出てきたことはない。年を取って、涙脆くなったせいでもあるまい。他の二人も涙ぐんでいるようだ。始めは楽勝かと思われたチョム・カンリも、天候が安定せず降雪に悩まされ意外とルートも延びず、時間切れの可能性も出てきた中での、登頂だった。non sherpaで充実していたのもあつただろう。11日にBCからFIXを掘り起こしながらC1入りし、それから上がりっぱなしで、疲れがピークに達していたので、感極まったかもしれない。とにもかくにも嬉しい。C1・BCに登頂の交信をし、祝福を受け、急いで東京農大からHAJに依頼された積雪のサンプルの採取をする。武部さんとはいうと、やはり頂上でも煙草をうまそうに吸っている。恐れ入る。これだけ高所で吸うと煙草会社も喜ぶだろう。C2へは

チョム・カンリ 個人行動表 (佐藤)



▼C 2 から稜線へのルート工作



14時20分到着。B隊がC 2入りしないというので、C 2に泊まり明日下山することになった。

登頂記

武部秀夫

8月16日午前5時30分、チョム・カンリ南壁高度6600mの第2キャンプで目覚める。テントの外をのぞくと、月も星もなく、ただただガス。視界は100mはありそうだ。いい天気でないことに第2キャンプの3人(佐藤副隊長、武部、川崎)はがっかり。それでも黙ってシュラフをたたみ水をつくる。今朝も即席天ぶらそば。水分を意識的に多く摂取。アタックの装備を早々すまし明るくなってくる8時まで、テントで待機する。風雪はなく、ひたすら濃いガスが晴れてくるのを待つ。佐藤副隊長が、「とにかく行けるところまでやってみよう」ということで外に出る。隣峰のダブラー峰6500mの頂上部が明るくなってガスが切れだした。第2キャンプから左上してゆく最初の3ピッチは昨日ルート工作済なので、川崎、佐藤、武部のオーダーでユマーリングしてゆく。8時の交信で、「天候状況を見ながら行けるところまでやる。」と隊長と確認する。第2キャンプからは、雪壁が2ピッチ、3ピッチ目で雪稜に出る。ここで佐藤副隊長がトップに出て、1ピッチフィックス。川崎くんは、ここで荷をデポ、空身でラッセル。2番手は武部でフィックス1本とスノーバー2本赤旗15本持つ。ラストは佐藤さん、3人コンテで登山してゆく。視界はあいもかわらず良くない。ただ進もうとしている上部の稜線がちらちら見えるのが心強い。雪が安定している雪壁を進む。30m間隔で赤旗をさしてゆく。11時には、高度6900mは

きたのか、ここで交信。佐藤副隊長が、武部、川崎のコンディションと登山意欲を確認、まわりのルート状況、天候状況を報告。少なくともあと2時間程で登頂できる可能性ありと判断。隊長に「突っこみたい旨」をお願いする。交信後すこし明るく視界が一時200mぐらい見え出す。左右の雪稜が、我々がいるところから100m程上部でジャンクション状態になっているのが目視できた。あと少しだ。3人とも疲れてきているが頂上までの距離感がつかめたせいか、がんばれる。そうしているうちに傾斜がすこぶる落ちた。いよいよ頂稜部とを感じる。あとはほとんど傾斜もなく稜線がつづく。ふりかえるときれいに赤旗がガスの中で映えている。めだつ赤だ。12時40分、前方が下りぎみになったところで、登頂とする。川崎、武部、佐藤、おもわず、登頂できたことを喜び、苦しかった、つらかったことが脳裏をよぎり年がいもなく涙が出た。お互い抱きあった。隊長へ交信。第1キャンプでは、祝福下さいました。下部は、雪崩のオンパレードで2次アタックを見あわせるとのこと。今回の登山は、ほんとうにしんどかった。気性が激しい女神は、なかなか登らせてくれなかった。ベースキャンプを出て、氷河登山、氷河プラトーでのルート工作と雪壁、雪稜、三角岩峰をこえてのC 1。さらに稜ではなく壁が続くC 2へのルート工作と荷上げ。よくない天気。はじめから統合力が1人1人に求められ休める箇所がほとんどなかったルート。しかし困難を克服して登りきった山なので、うれしさも倍増しました。下りは3人コンテで気をはりながら14時20分に第2キャンプに無事着。登山隊をささえて下さった方々、メンバーの方々、ほんとうにありがとうございました。気性に激しい知恵の女神に感謝します。

夏のチベット登山隊について雑感

武部秀夫

チベットの7000m峰へは今回で3回目です。1989年スー・カンリ(7308m)はプレモンスーン、1998年ニンチン・カンサ(7206m)と今回のチョム・カンリ(7048m)はモンスーン期の登山です。3回とも幸い登頂できましたが、自分の体験からモンスーン期のチベットでの登山について考えて

みました。今年こそは、比較的ましな天気であろうと楽観して入山しましたが、みごとにはずれました。昨年のニンチン・カンサは、チベット、長江上流部での異常気象の影響をまともにうけ、毎日が雪、みぞれ、雨と雷の中での登攀でした。ヤルツァンポの南に位置していることもあってかモンスーンの影響は多大にうけるものでした。今年のチョム・カンリはというと、ニンチンよりも北へ100kmのところでありチャンタン高原の南線に位置するため、すこしはましだろうと思っていました。現実には、登山期間30日中、晴の日はわずか2日。雷こそ直撃はなかったものの、登頂時は昨年よりも悪かった。やはりまともにモンスーンの影響と独立峰であるためか、その影響を受けました。ちなみに、チベットの地形図を見るとあきらかな様に、インドからシッキムを経てチベットへは直線距離にしてわずか250km。それもヒマラヤ山脈を割っているチュンビー溪谷ぞいですので、モンスーンの影響はチベットとはいえまともに受ける山群です。やはりベストのシーズンは、春と秋です。この点、登山隊員は、もっと理解しておく必要があります。モンスーンの影響がもろにくることを理解した上で、タクティクスを組むことです。登頂率が悪いのが当然で、あえてこれを克服しようとする為には、全天候型のタクティクスを強く組んでいくことが必要でしょう。それとモンスーン期での降雪状況それに伴う雪崩状況をしっかりと

▼ターシャへの登り



勉強した上で、高所順応を完璧にした登り方がいいでしょう。意外とアルパインスタイルによる登頂方法がベターかも知れません。

チベットの場所にもよりますが、やはり、通常の登り方をするのであれば、春、秋がベストです。モンスーン期は、やはり無理あるところと言えます。ただモンスーン期でのメリットは、比較的アプローチがスムーズに事がはこぶことでしょう。実際、プレの時は、積雪多くチョー・オユー山群で、1週間も時間をロスした経験もありますので。又、ベースキャンプの高度も5300mあたりでも緑のじゅうたんでブルーポピーも多く咲いています。初期高度順化をじっくりとやれば、比較的楽しいベースキャンプ生活がおくれるように思います。

今後、チベットに行かれる方への参考になれば幸いです。それにしても大事なことは、チベットの仏様への感謝の気持ちを持つことでしょうか。祈りつづければ吉祥がおとづれることかと思えます。オムマニペメフム、オムマニペメフム。



▲ABCにて



▲チョム・カンリ南壁の雪崩の跡

地域ニュース

《パキスタン》

パキスタンで軍事クーデター

10月13日未明、パキスタンでムシャラフ軍参謀総長兼陸軍大臣主導のクーデターがおこり政府の建物や空港、国営テレビ局を軍が占拠、現政権は一夜にして転覆した。シャリフ首相等現閣僚は自宅で軟禁された模様。ムシャラフ軍参謀総長は1943年8月ニューデリー生まれの56歳。昨年10月、シャリフ首相に批判的だった前任者に代わり軍参謀総長に就任していたが、今年夏におこった、イスラム原理主義民兵によるインド側カシミール進入事件の処理をめぐる首相と対立していた。

《インド》

日本山岳会東海支部2隊初登頂に成功

水野起己(48)隊長ら7名のウムドン・カンリ峰(6643m)隊は7月29日にBC(4800m)を設営、西稜にルートをとって、8月8日水野隊長と青戸慎太郎(52)隊員が高所ポーター二人とともに初登頂に成功した。

鈴木常夫隊長ら6名のラカン峰(6250m)隊はウムドン・カンリ峰隊と同じくパラン峠(5580m)を越え、8月2日にBC(5100m)を設営。8月8日に鈴木隊長と田中守之(70)、志賀 勤(65)、渡辺くみ(63)隊員の4名と5名の高所ポーターが初登頂に成功した。

両峰はヒマチャル・プラデシュ州の北部、チベットとの国境に近いスピティ地区にある。付近にはまだ多くの未踏峰が残されている。

《中国》

クライミング・ファイト隊チョー・オユー登頂、他国際公募隊に邦人3名参加

チョー・オユー西稜及び南西壁スイス・ポーランドルートを目指していた同人クライミング・ファ

イト隊(坂本正治隊長(39)以下4名)は、9月26日西稜ルートから坂本隊長と大神田伊曾美(55)、高橋尚子(34)の3名が登頂した。単身南西壁スイス・ポーランドルートの第3登を目指した北村俊之は同ルートを断念、10月1日西稜ルートから単独登頂、全員が登頂した。

なお、この他にニュージーランドのアドベンチャー・コンサルト隊に参加していたオオクボ・ユキミツとアラヤマ・タカオの2名、ラッセル・ブライスの国際公募隊に参加していた日本人(サダオ)1名のうち、アドベンチャー隊の1名が登頂に成功した。

女性2人ムスターグ・アタに登頂

9月12日、大久保由美子(30)、恩田真砂美(32)の2人が、ムスターグ・アタ(7,546m)に西稜から登頂した。

チベット連続登頂隊結果

チベットの2座連続登頂を目指していた日本ヒマラヤ協会隊(山森欣一隊長ら6名)は、最初の目標カバン峰(6,717m)に挑んでいたが、10月4日6,550mでクレバスに阻まれ登頂を断念した。その後、カバン峰だけで帰国する伊藤満隊員以外の5名は、次なる目標のナムナニを目指して移動。10月18日14時14分、松館正義副隊長(55)と樋上嘉秀(55)、岩崎洋(39)、野沢井歩(35)、古谷朋之(26)の4隊員計5名が、隣接するグナラ峰(6,902m)に初登頂、25日には岩崎、野沢井、古谷の3名がナムナニ(7,694m)東壁の初登攀に成功した。

アレックス・ロウ、シシャパンマで雪崩で死亡

プロクライマーとして有名なアメリカの登山家アレックス・ロウ(40)が、シシャパンマ南西壁スイス・ポーランドルート(初登ロレタン・トロワイエ・クルティカ)のスキー滑降を目標に登山していたが、10月5日雪崩によりカメラマンのデイビッド・ブリッジ(29)と共に行方不明となり、生存は絶望となった。一緒に雪崩に巻き込まれた

コンラッド・アンカー（今春チョモランマでマロリーの遺体を発見したアメリカ人）は50m流されただけで命拾いをした。

アレックス・ロウは80年代のフリークライミング、ヨセミテのビックウォールで名を馳せ、最近アメリカで盛んになってきたモダンミックスと呼ばれるクライミングシーンをリードしてきた。高所登山ではチョゴリやチョモランマのカンシュンフェース、GIVなどのバリエーションにトライしていたがいずれも失敗。ハン・テングリのスピード登山競争で優勝。公募隊のガイドで2度エベレストの頂上に立っている。婦人と3人の息子がいる。尚、いわゆるロウ兄弟とは血縁関係はない。

《ネパール》

札幌岳連隊マナスル北峰登頂

冬季マナスルを目指している札幌山岳連盟マナスル冬季登山隊（江崎幸一隊長以下7名）が10月17日、マナスル北峰（7,157m）に登頂した。登頂したのは工藤寛副隊長（33）、井嶋健一（36）、井上剛（34）、高橋留智亜（34）の4名。19日には江崎隊長、阿波徹（36）、大坂卓也（38）もアタックの予定。

同隊はいったんカトマンズに戻って休養後11月下旬マナスルに向かう予定。

大津二三子さん日本大使館から表彰

カトマンズ在住で、日本人登山者、トレッカーが多くお世話になっているコスモトレックの大津二三子さんが日本大使館から表彰を受けた。表彰理由は、長年の旅行会社の営業を通して、旅行者、在留邦人、ネパール観光維持事業に多大に寄与したことが評価された為。

この表彰は今年から、外務省が各在外公館に推薦・選定を依頼し大使表彰する事になったもの。尚、表彰式は8月16日に行われた。（登山時報）

ヒマラヤから

チベット連続登頂隊第一報

9/10 山森、松館、樋上、伊東の4名はCA926便で成田を出発し17時15分北京に到着。北京北門飯店に投宿。夜は顔中国登山協会副主席、張、榮両部長、趙副部長の招宴。その後、張部長と若尼峰、ヤンラ・カンリの件について協議する。

9/11 4人は北京から成都へ移動。夜はJAC雪宝頂隊の神崎、宮崎両氏と李致新CMA副主席と夕食。

9/12 4人は成都からラサへ移動。今回の連絡官である成天亮氏の出迎えを受けてヒマラヤホテルに投宿。午後はゆったりと過ごす。

9/13 4人は午前中、装備の再梱包に精を出し、午後は膨大な食糧の買出しを行う。夜はチベット登山協会、高謀興秘書長の招宴。

9/14 山森を除く3名は裏山（約4400m）まで高所順応。午後荷物をトラックに積み込む。夜はローサン・ダワ氏の招宴。

9/15 朝、ニマ・ツェリン氏、台湾に高銘和氏と会う、10時過ぎジープ2台でラサを出発。ヤル・ツェンポー江沿いの道を走り、16時50分シガツェに到着。夜は1987年ラブチェ・カン合同隊でお世話になったシガツェ登山協会の托珠氏の招宴。

9/16 シガツェ（雨）を9時過ぎに出発。ジャツォ・ラ（5220m）を越えてシガールへ。雨のために道路はガタガタでラツェで我々のジープもはまってしまった。

9/17 シガールを9時過ぎに出発。ティンリ近くでチョー・オユーとラブチェ・カンを見て、シシャパンマへの分岐を見てラルン・ラは雨の中。14時30分ニェラムに到着。ここからが泥道となりザンムー（2350m）に着いたのは17時過ぎであった。既にネパールから到着していた岩崎、野沢井、古谷の3名と2ヶ月ぶりの再会を喜ぶ。意外と涼しいザンムーである。ザンムーの入国のアレンジをリンチンピンゾー氏が行っていた。

9/18 税関の手続きもれがあり、10時前にザンムーを出発。ニェラムを通りラルン・ララブチェ・カンの雄大な姿を見て、その先からシシャパンマ北麓への道を辿り、ベッグ・ツェを見てマ・ラ（5234m）に立つが雲が多く展望は効かない。18時過ぎ4170mのジーロン県に到着。

9/19 9時過ぎにジーロンを出てトラックを待ちながら11:35グン(4000m)に着く。しかし、トラックが上がれず、民工で荷を運ぶ事になりそうで、登山開始は少々遅れそうですが全員元気です。

(山森)

チベット連続登頂隊第2報

9/19 思わぬことにトラックがグン(4100m)まで入れないことがわかり、一時はどうなることかと思っただが、トラクター3台に分乗して無事到着。

9/20 グンに滞在して再梱包。ポーターは30kg担ぐというので大感激である。午後東京からの4人はBC往復。

9/21 24人のポーター(内女性7人)でBC(4700m)入り。残った5個も2度目のポーターが担いできた。BCにタルチョーとHAJ旗が掲げられる合計5張りのテント村が出現。小川が流れ池がある草地でとても雰囲気がある。夜は盛大にBC開き。

9/22 休養と装備類の点検、O2などの講習会、グンから羊肉が上がって来たので日本へのメールを依頼する。

9/23 山森は上部登山活動はしないので6人でC1予定地(5180m)往復。ほとんど川原とモレーン歩き、C1はナス氷河上、川の渡渉に苦労する。

9/24 岩崎、野沢井、古谷は夏のスパンティック登山で順応が進んでいるのでAチームとして先行することとなり本日C1入り。残るBチームは休養。

9/25 Aチームはナス氷河からカバン峰の東稜のゴル上部を目指し5935mにC2予定地を確定C1泊まり。BチームはC1へ荷上げしBCに戻った。

9/26 AチームはC2予定地に荷上げしさらに上部を偵察してBCに戻った。BチームはBCで休養。ここまでモンスーン中には天候はまずまず。BCの朝8時(北京時間)で気温0℃。14時10℃と暖かく、夜半雨が降っている。

9/27 陽射しが強い。BチームはC1へ移動。AチームはBCで休養。

9/28 入山以来最高の好天。BチームはC2予定地へ荷上げ。左岸段丘に登りこの模様を700mm望

遠で撮影。満点の星と天の川。

9/29 BチームはBCへ下山。AチームBC休養。全員で記念写真を撮る。

9/30 一時雨もいい天気。AチームC1入り。古谷不調。BチームBC休養。

10/1 一日気温上がらず。Aチーム天候待ちC1待機。BチームBC休養。中国50周年日本酒で中国側祝福。

10/2 AチームC2建設。BチームBC待機。BC最高気温8℃。

10/3 悪天、AチームC2天候待機。BチームC1入り。トランシーバー一時故障(隊長用)。

10/4 Aチーム固定ロープ13本張り6450mまで、BチームC1待機。

10/5 Aチーム固定ロープ4本張り6550mまで、BチームC2移動も樋上不調でC1へ戻る。15時25分最高到達点、岩崎からクレバス多くこの上ルートにならない旨報告あり、登山中止を決定する。AチームC2撤収しC1まで下山。Bチームと合流。(山森)

インフォメーション

日山協 海外女性懇談会

表記の会が下記のとおり開催される。

日時：1999年12月9日(木) 18:30~21:00

場所：岸記念体育館

会費：1500円(資料代、お茶代含む)

テーマ：ヒマラヤへ出掛ける女たち

—異なるアプローチからその魅力を語る。

内容：「近年の女性海外登山の動向について」

寺沢玲子 同人パハール日本ヒマラヤ協会

「組織の高峰登山のオーガナイズの面白さ

について」橋本しをり 女子登攀クラブ

「個人単位での高峰登山の方法とその面白

さについて」大久保由美子

申込み：(社)日本山岳協会事務局までハガキまたはFAXで、住所、氏名電話番号を明記の上、お申し込み下さい。

申込み・問合せ先：(社)日本山岳協会

〒150-0041 渋谷区神南1-1-1 岸体育館内

BOOKS

冒険物語百年

武田文男 著

十九世紀後半から現代までの冒険家と言われる主な49人の49話をまとめた物語である。

底本は「朝日小学生新聞」に96年4月から1年間『未知を求めて——世界探検・冒険史を彩る人びと』と題して週一回、連載したものに加筆・改題して大人にも読めるよう手を入れて文庫化した書である。

舞台は大まかにヒマラヤからアルプスその他、そして極地。と地球をとりまく総てにかかわっている。登場する人物はモンブランに初登頂したパカルとバルマから大場満郎の南極徒歩横断まで多士済々、登場順も年代を追ってはいないが違和感もなく読み進める。

なかでもメジャーではないがユニークな視点と行動で、様々なジャンルの歴史に存在感を現わしている人物の紹介は、当初の読者であった児童のみならず、本書の対象者にも興味をもたせる内容である。

神懸かり的にエベレストに挑んだアール・デマン、「幸運の女神」であるべきナンダデビー峰に翻弄されたウィリー・E・アンソールド、文盲でありながら正確な記憶力でヤルツェンポーの謎を解いたキンタップ、ヒマラヤを越えるツルを見て登頂を成功に導いた松田雄一。等々、彼等の足跡と功績を知ること、さらなる興味を呼び起こす弾みとなるであろう。

49の冒険譚の他にアニメの北極圏特集から転載した『北極探検史』で「白い道」の歴史を語り『二十一世紀の冒険はどこへ』の稿で滅びゆくヒマラヤと極地を救う道を探る。

巻末の資料では『主な探検・冒険の歩み』として「ヒマラヤ」「欧米・アフリカほか」「日本」「北極」「南極」の年表。

『主な関係図書』として「ヒマラヤ」「アルプス」「中央アジア・チベット」「極地」「日本」「自伝・

エッセイ・紀行」「事典・探検史」が著者別で紹介されており、より深く知りたい読者には貴重な資料となっている。

『あとがきに代えて』にもあるように、紹介されて当然の人物の登場がなく、残念な点もあるが文庫本としては内容も豊富である。

読書離れの時代とはいえ、山に向う人には是非一読を薦めたい。そして先蹤者の苦難と足跡を知って、現在おこなっている登山と将来の登山を考えてほしいものである。(出口 當)

朝日文庫 323頁 660円+税

発行 朝日新聞社 1999年10月1日刊

トピックス

「超人」のピッケル? 発見

「超人」と呼ばれたオーストリアのヘルマン・ブルが初登頂したナンガ・パルバットに残したと見られるピッケルが見つかった。7月に登頂した日本勤労者山岳連盟隊の池田荘彦さんが頂上直下約10メートルの岩陰で見つけ、持ち帰った。今季は雪が少なく、山頂から約3百メートル下まで岩が露出していた。ピッケルには登攀隊長の名前が刻印され、ブルの著書にある写真に酷似していた。

ヒマラヤは最近、地球温暖化の影響と思われる氷河の後退などが目立ち、今年5月、世界最高峰エベレストで行方不明になったジョージ・マロリー(英)の遺体が75年ぶりに発見されるなど、先人の遺体や遺品が相次いで見つかっている。

(朝日新聞 9・5)

《事務局財政支援金》 桑川章(2万円)

東京集会のお知らせ

日時	11月29日(月)午後7時~
内容	チベット連続登頂隊報告
場所	HAJルーム(地下鉄有楽町線東池袋下車4番出口から地上に出て右へ徒歩2分) 又は、JR大塚駅下車、都電荒川線の早稲田方面2つ目の東池袋4丁目下車、前方で右に折れて地下鉄出口から徒歩2分)

2000年H A Jサマー・キャンプ隊員募集

玉珠峰 (6,179m)

青海省の省都である西寧から西へ約1,000キロ。山中には1週間滞在の予定です。

記

1. 期 間:2000年7月23日～8月12日(21日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負 担 金:65万円
4. 〆 切 り:定員になり次第
5. 資料請求先: H A J事務局

チョム・カンリ (7,048m)

ラサから西北西約106kmの所にあるのが、チョム・カンリです。1996年秋中国・韓国合同隊によって初登頂され、97年春に日本隊が登頂しています。ルートは既登の南面を予定していますが、隊員の協議によって変更される場合があります。

記

1. 期 間:2000年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負 担 金:85万円

ニンチン・カンサ (7,206m)

ラサから半日行程の所にヤムドク・ツォと呼ばれる大きくて美しい湖があります。その湖を見下ろすようにそびえているのが名峰ニンチン・カンサです。日本隊は既に3隊が登頂に成功していません。ラサからゆっくりと入山し、登山期間は26日間を予定しています。

H A Jの登山隊は全てガイド登山ではありません。自己責任を認識して登山隊を構成します。

記

1. 期 間:2000年7月20日～8月25日(37日間)
2. 募集人員:10名程度
3. 負 担 金:85万円

山の情報誌「岳人」



毎月15日発売 (日・祝日の場合は前日) 定価700円

■本誌の年間購読ご案内

本誌の購読は、全国の書店、東京新聞販売店、中日新聞販売店、北陸中日新聞販売店で承ります。

直接購読ご希望の方は、とじ込みの振替用紙に「岳人何月号」からお書きのうえ、送り先郵便番号、住所、氏名を明記して、ご送金ください。

郵送料は124円です。年間購読料は8,900円で送料は当社負担です。

お求めの本誌に乱丁、落丁がありましたらお取り替えいたします。

99年	特 集
★ 1月号	雪の槍ヶ岳・穂高連峰・笠ヶ岳を登る
2月号	再発見・八ヶ岳 森の逍遥から氷瀑まで
★ 3月号	魅惑の雪稜、滑降三昧の後立山連峰
4月号	残雪の上越国境、奥利根源流を訪ねて
★ 5月号	新緑の頸城・戸隠 北の山、南の山
6月号	南アルプス、鋸岳から光岳、深南部へ
★ 7月号	花、尾根、沢の東北の盟主・朝日と飯豊
8月号	幽遠の黒部溪谷、岩壁、源流、高原へ
9月号	森と尾根と谷、紀伊半島の大峰・台高
★10月号	南会津と奥美濃、山里の魅力も探る
11月号	秋深い奥秩父と西上州 その山と人
12月号	岩と雪の殿堂・剣岳と立山連峰へ

(★は特大号・800円となります)

東京新聞出版局 (中日新聞) 〒108-8010 東京都港区港南2-3-13 TEL 03-3740-2674
(東京本社) 全国の書店で発売中/中日新聞販売店でも取りつぎます

四川省登山の和文参考資料一覽

(1979年開放以後のもの)

- 1) ミニヤ・コンカ (Minya Konka) 7,556m
1. 貢嘎山 (1981年ミニヤ・コンカ7,556m登攀と遭難の記録) 北海道山岳連盟 1982年12月30日
2. 貢嘎の東 (中国四川省大雪山脈貢嘎山7,556m偵察の記録) 北海道山岳連盟 1981年3月1日
3. 手記・さようなら、北壁に逝った友よ (阿部幹雄)「山と溪谷531号」1981年8月号
4. さようなら、ミニヤ・コンカの友 (阿部幹雄)「山と溪谷531号」1981年8月号
5. コンカ山・銀雪の王 (羅仕明)「月刊 人民中国」1982年11月号 200円
6. コンカで遭難した松田隊員救出記 (曾慶南)「月刊 人民中国」1982年11月号 200円
7. ドキュメント: ミニヤ・コンカ大生還へのミステリー (徳丸荘也)「山と溪谷546&547」1982年8 & 9月号
8. インタビュー:「ここでは絶対にしねない」(編集部)「岳人423号」1982年9月号
9. ミニヤ・コンカの奇跡 (救出、治療の戦い) 李高中「岳人423号」1982年9月号
10. ミニヤ・コンカ奇跡の生還 (松田宏也) 山と溪谷社 1983年1月20日 900円
11. 手記: ミニヤ・コンカからの生還 (松田宏也・構成徳丸壯也)「山と溪谷552号」1983年1月号
12. ミニヤ・コンカの生と死 (編集部)「岩と雪90号」
13. 山一青春 菅原信・中谷武両君に捧げる 市川山岳会ミニヤ・コンカ登山隊 1984年5月
14. 1982年ミニヤ・コンカ遭難の記録 市川山岳会ミニヤ・コンカ登山隊 1984年5月
15. 登山史を語る山道具 (松田宏也の装備品)「山と溪谷615号」1986年12月号
16. 貢嘎山 (ミニヤ・コンカ7,556m) 貢嘎山実行委員会 1990年6月
17. シャクナゲとパンダとミニヤ・コンカ—中国四川省の自然探求トレッキング (富山稔)「山と溪谷668号」1991年3月号
18. ミニヤ・コンカを目指して—HAJ MINYA KONKA EXP 1991—「ヒマラヤ238号」1991年9月号
19. 西康の大地に聳える天壇の山 ミニヤ・コンカ峰登山記「ヒマラヤ242号」1992年1月号
20. 天壇の山に挑む ミニヤ・コンカ東面 日本ヒマラヤ協会 1992年5月
21. ミニヤ・コンカ山麓の海螺溝を行く (渡辺千昭)「岳人555号」1993年9月号
22. ミニヤ・コンカ登山計画「ヒマラヤ274号」1994年9月号
23. ミニヤ・コンカ峰登山と遭難の記録「ヒマラヤ279号」1995年2月号
24. ミニヤ・コンカに消えた4人 (山森欣一)「山と警告713号」1994年12月号
25. 魔性の棲む山ミニヤ・コンカ〔上・下〕(阿部幹雄)「山と溪谷714~715号」1995年1~2月号
26. ミニヤ・コンカ西側と康定周辺 (中村保)「ヒマラヤ276号」1994年11月号
27. 未踏峰の誘惑 GWの海外登山、ある雪崩遭難から (難波城行)「山と溪谷707号」1994年6月号
28. ミニヤ・コンカ登山計画「ヒマラヤ274号」1994年9月号
29. ミニヤ・コンカ西側と康定周辺 (中村保)「ヒマラヤ276号」1994年11月号
30. ミニヤ・コンカ峰登山と遭難の記録「ヒマラヤ279号」1995年2月号
31. ミニヤ・コンカ峰 登山と遭難の記録 日本ヒマラヤ協会 1996年4月
32. 神々しい山 ミニヤ・コンカ (芳賀正志)

- 「岳人601号」1997年7月号
- 33.「魔性の棲む山」ミニヤ・コンカ 日本人初登頂の記録「山と溪谷744号」1997年7月号
 - 34.貢嘎山 札幌山岳会 1997年12月
 - 35.ミニヤ・コンカの輝く微笑み (芳賀正志) 「山岳第93年」日本山岳会 1998年12月5日
 - 36.中国四川省・ミニヤ・コンカ峰(7,556m)一周 (竹内康之) 岳人619号 1999年1月
- 2) スークニャン (Siguniang) 6,250m
 - 1.四姑娘山1981 同志社大学体育山岳部 1982年10月24日
 - 2.壮士征姑娘羅姑娘愛壯士 鋭峰・四姑娘山の初登鋭 (川田哲二) 「岳人412号」1981年10月号
 - 3.四姑娘山・やさしい乙女 (羅仕明) 「月刊人民中国」1982年7月号
 - 4.中国四川省・四姑娘山群のビッグ・ウォールを攀る (エリック・パールマン) 「岩と雪106号」
 - 5.四姑娘山の旅 (角田不二) 「ヒマラヤ145号」1983年12月号
 - 6.四姑娘山の自然 (山岸喬) 「ヒマラヤ150&151号」1984年5 & 6月号
 - 7.四姑娘山の山脈 「ヒマラヤ153号」1984年8月号
 - 8.スークニャンの山旅 (小林英見) 「ヒマラヤ157&158」1984年12&1985年1月号
 - 9.大姑娘山麓トレッキング (伊佐九三郎) 「山と溪谷社630号」1988年1月号
 - 10.遥かなり白き姑娘の微笑み 中国四川省未踏峰四姑娘山初登頂 (吹田佳晴) 京都通信社 1990年10月 3,000円
 - 11.四姑娘の2つの峰 「ヒマラヤ254号」1993年1月号
 - 12.四姑娘山南壁へ (吉村千春) 「岩と雪156号」1993年2月号
 - 13.美しき谷の姉妹峰 (四姑娘登山の記録) 日本ヒマラヤ協会 1993年3月20日
 - 14.四姑娘山南壁の初登攀 (吉村千春) 「山岳第88年」日本山岳会 1993年12月
 - 15.四姑娘山群 (1992年夏の記録) 広島山の会 1994年1.20
 - 16.大姑娘山高山植物の宝庫 (渡辺千昭) 「岳人598号」1997年4月号
 - 17.知られざる山々 四川省邛崃山群の岩峰群 (中村保) 「ヒマラヤ324号」1998年11月号
 - 18.中国四川省・邛崃山系の岩峰群 (中村保) 「岳人617号」1998年11月号
- 3) ゲニ (Geni) 6,024m
 - 1.格聶 (ゲニ) 偵察報告 (山森欣一) 「ヒマラヤ183号」1987年2月号
 - 2.神の山、ゲニ登山計画 「ヒマラヤ189号」1987年8月号
 - 3.神の山、ゲニ峰 残してしまった課題 (飛田和夫) 「ヒマラヤ192号」1987年11月号
 - 4.神の山、ゲニ峰 日本ヒマラヤ協会 昭和62年12月1日
 - 5.神の山、ゲニ峰-H A J ゲニ峰登山隊計画 「ヒマラヤ199号」1988年6月号
 - 6.神の山、ゲニ峰初登頂 「ヒマラヤ202号」1988年9月号
 - 7.白く輝く神の山・ゲニ初登頂 (飛田和夫) 「山と溪谷638号」1988年9月号
 - 8.未踏の秘峰 ゲニ初登頂 (飛田和夫) 「岳人495号」1988年4月号
 - 9.雨の山晴の山 秘峰ゲニ初登頂 (遠藤京子) 「岳人495号」1988年9月号
 - 10.神の山 格聶峰 (1988年初登頂の記録) 日本ヒマラヤ協会 1989年6月12日
 - 4) チェルニヤン (Chola Shan) 6,168m
 - 1.中国の未踏峰チェルニヤン山に日中学生合同で14人が登頂 (神戸大学・中国地質大学合同登山隊) 「岳人500号」1989年2月号
 - 2.日中合同登山隊のチェルニヤン山登頂とその意義 (平井一正) 「山522号」1988年12月号
 - 3.チェルニヤン初登頂 (神戸大学・中国地質大学〔武漢〕合同登山隊) 「山岳第84号」日本山岳会 1989年12月20日 3,500円
 - 4.雀児山周辺を探る (中村保) 「ヒマラヤ251号」1992年10月号
 - 5.碧き湖を抱く雀児山 (さがみ家族山の会) 1996年11月29日
 - 5) シャラリ (Xiarali) 6,032m
 - 1.桃源境への旅 シャラリ登山計画 「ヒマラヤ

- 210号」1989年5月号
2. 桃源境への旅 もう一つのチベット シャラリ峰登山記「ヒマラヤ216号」1989年11月号
 3. もう一つのチベットへ 桃源境への山旅 シャラリ峰登山の記録 日本ヒマラヤ協会 1990年3月
 - 6) シュエバオ・ディン (Xuebao Ding) 5,588m
 1. 雪宝頂及びその姉妹峰について (鄭榮発) 「ヒマラヤ174号」1986年5月号
 2. 岷山の霊峰へ (日中四川雪宝頂合同登山計画) 「ヒマラヤ177号」1986年8月号
 3. 天府の霊峰 雪宝頂「ヒマラヤ180号」1986年11月号
 4. 日中合同雪宝頂登山の印象 (羅凡) 「ヒマラヤ185号」1987年4月号
 5. 天府の霊峰 雪宝頂 日本ヒマラヤ協会 1987年8月5日
 6. 天府の霊峰 雪宝頂を目指して-1991年雪宝頂登山隊計画「ヒマラヤ237号」1991年8月号
 7. 雪宝頂の白い鋭峰 (中国四川省・雪宝頂登山隊報告書 さがみ家族山の会 1990.11.20)
 8. 天府の霊峰 雪宝頂登頂-1991年夏の記録-「ヒマラヤ240号」1991年11月号
 9. 美しき白い峰・小雪宝頂 中国四川省・小雪宝頂登山隊報告書 さがみ家族山の会 1991年10月12日
 10. 天府の霊峰 小雪宝頂を目指して「ヒマラヤ246号」1992年8月号
 11. 麗しき四川の夏 雪宝頂登頂 日本ヒマラヤ協会 1992年12月1日
 - 7) ミンシャン
 1. 岷山の秋・1983 中国ナムチャ・バルワ登山隊強化合宿の記 (角田不二) 「ヒマラヤ148号」1984年3月号
 2. 中国人の岩登り訓練-1983年-「HIMALAY A日本ヒマラヤ協会年報Ⅲ」昭和61年9月15日
 - 8) その他
 1. 中国・四川省の魔境“恐怖の死亡谷”探検記 (斎藤克己) 「岳人581号」1995年11月号
 2. 遥かなる深遠の地 稻城「ヒマラヤ311号」1997年10月号
 3. ラモ・シェ (田海子山・6,070m) 登山計画「ヒマラヤ321号」1998年8月号
 4. 四川の夏・ラモ・シェ (6,070m) 登山報告「ヒマラヤ324号」1998年11月号
 5. 未知未踏の岩壁を求めて (中国四川省の岩峰を初登頂) 登山隊報286号 1998年12月号
 6. 未踏峰の宝庫 中国・四川省大渡河流域の雪山を探る (中村保) 「岳人 号」
 7. 東チベット紀行 (E・タイクマン、水野勉訳) 白水社 1986年7月5日 2,200円

青海省登山の和文参考資料一覧

(1979年開放以後のもの)

- 1) アムネマチン (Anemaqin) 6,282m
 1. アムネマチン初登頂 (上越山岳協会) ベースボールマガジン社 1982年1月30日 2,400円
 2. アムネマチン・写真集 (上越山岳協会) ベースボールマガジン社 1981年12月15日 4,000円
 3. アムネマチン峰・大いなる神 (張祥) 「月刊人民中国」1982年10月号
 4. 上越山岳協会アムネマチン登山隊の記録「山と溪谷532号」1981年9月号
5. アムネマチン主峰初登頂 (1981年5月の記録) 「岳人411号」1981年9月号
6. アムネマチンⅡ峰登頂の記録 (日中合同登山技術研究会実行委員会) 「岳人450号」1984年12月号
7. ザイルでつなぐ日本と中国 (酒井國光) 「岳人450号」1984年12月号
8. 友好の阿尼瑪 (第四次日中合同登山技術研修

- 隊) 1985年7月29日
9. 勇攀高峯 アムネマチン 未踏ルートに挑む
山梨県山岳連盟 1994年1月30日
 10. 中国の桃源郷・アムネマチンを巡る (伊佐九三四郎)「山と溪谷679号」1992年2月号
 11. Mt. Animaqing P 5 鳥取大学 1995年2月
- 2) 黄河周辺
1. 母なる黄河の源流を訪れる「ヒマラヤ163号」
1985年6月号
 2. 黄河源流探検報告「ヒマラヤ167号」1985年
10月号
 3. 中国青藏高原に黄河源流を探る (八木原聡明)
「岳人461号」1985年11月号
 4. 黄河源流を探る 読売新聞社 昭和60年11月
13日 1,300円
 5. 黄河万里行 中国・水利部黄河水利委員会
「恒文社」1984年6月15日
 6. 概念図も写真もない中国中央部黄河源流域
(Topics)「山と溪谷594号」1985年9月号
 7. 85青藏高原探検隊学術班報告「ヒマラヤ178
号」1986年9月号
 8. ルポ・黄河源流行 (江本嘉伸) 読売新聞社昭
和61年9月 1,400円
 9. 日本山岳会中国登山隊1985報告書—黄河源流
騎馬旅行— (日本山岳会中国登山隊1985年実
行委員会) 1986年1月31日
 10. 青海高原 西寧から成部へ (京都山の会)
ナカニシヤ出版 1990年9月 2,400円
- 3) 長江源流周辺
1. 青蔵No.1 青蔵高原登山研究会 1984年4月
27日
 2. 青蔵No.2 青蔵高原登山研究会 1985年6月
20日
 3. 長江万里行 長江万里行編集グループ「恒文
社」1984年5月15日 1,900円
 4. 長江—源流から河口まで—外交出版社1980年
 5. 長江万里行に挑んだ中国青年「ヒマラヤ180
号」1986年11月号
 6. 格拉丹冬雪山初登頂と長江正源流調査 (松本
徃夫/倉智清司)「山岳第81年」日本山岳会
1986年12月 3,500円
 7. 中米合同長江探検「ヒマラヤ184号」1987. 3
 8. 遥かなる揚子江源流 (松本徃夫/松原正毅編)
日本放送出版協会 1987年5月 1,800円
 9. 雲表の国 青海・チベット踏査行 (色川大吉)
小学館 1988年3月 1,500円
 10. 青蔵紀行 揚子江源流をゆく (松原正毅)
 11. 長江源流900キロ、悠久の川旅 (山田高司)
「山と溪谷668号」1991年3月号
 12. メコン源頭のひとつをめぐって (藤森和則)
「山と溪谷727号」1996年2月号
 13. 遥かなり 曲阿加吉瑪 新潟県山岳協会
平成11年1月
- 4) 青蔵公路周辺
1. 雲上の道・青海～ネパール初縦断「ヒマラヤ
167号」1985年10月号
 2. チベット青藏高原に見た人・河・寺そして山
山 (中江啓介/大石英代)「岳人462号」1985
年12月号
 3. 日本山岳会中国登山隊1985報告—カカサイジ
モンカ山— (日本山岳会中国登山隊1985年実
行委員会) 1986年1月31日
 4. 悠久なり崑崙の夏 玉珠峰計画「ヒマラヤ259
号」1993年6月号
 5. 玉珠峰登頂 (H A J登山隊)「ヒマラヤ264号」
1993年11月号
 6. 中国、青海 東部崑崙 玉虚峰登山計画「ヒ
マラヤ272号」1994年7月号
 7. 崑崙の頂を踏む 青海・玉珠峰 日本ヒマラ
ヤ協会1994年8月
 8. 玉珠峰登山計画「ヒマラヤ273号」1994年8
月号
 9. 友好の頂・玉虚峰登頂「ヒマラヤ第275号」
1994年10月号
 10. 玉珠峰全員登頂「ヒマラヤ277号」1994年12
月号
 11. 東崑崙・天女の山 玉虚峰に登る 日本ヒマ
ラヤ協会 1996年2月
 12. 草原情歌—日中友好・沼東青蔵踏査隊の記
録から (久保田保雄)「山と溪谷696号」1993
年7月号
- 5) ブカダバン (Buka Daban・新青) 6,860m
1. 遥かなり新青峰 H A J崑崙登山計画「ヒマ
ラヤ199号」

2. 遥かなる新青峰への道 (H A J 崑崙登山隊)
「ヒマラヤ201号」1988年8月号
3. 中国、新青山群の山麓 (福山信) 「岳人498号」
1988年12月号
4. 崑崙山脈東部にそびえる未踏峰・新青峰はナ
キウサギの鳴く野性の秘境 (京都山岳会新青
峰登山隊) 「岳人508号」1989年10月号
5. 崑崙の秘境 新青峰 (京都山岳会) 1990年9月
6. 再び青藏高原へ 新青峰登山計画 「ヒマラヤ
246号」1992年5月号
7. 再挑戦でおとした長江源流の秘峰・新青峰
(福山信) 「岳人544号」1992年10月号
8. 青海省最高峰 新青峰初登頂記 (H A J 登山
隊) 「ヒマラヤ250号」1992年12月号
9. 東カンツァーリ峰 6167m 初登頂 (増山茂)

- 「岳人626号」1999年8月号
- 6) 祁連山脈周辺
 1. 「祁連山脈遠行」(柳木昭信／神永幹雄)
「山と溪谷597号」1985年11月号
 2. 日本山岳会中国登山隊1985年－祁連山脈、崑
崙、黄河源流 (宮下秀樹) 「山岳第81年」日
本山岳会 1986年12月
 3. 日本山岳会中国登山隊1985年報告書 祁連山
カカサイジモンカ山 黄河源流騎馬旅行 (日
本山岳会中国登山隊) 1986年1月
 4. 西望祁連 (福島高校山岳部OB会祁連友好登
山隊) 1989年1月
 - 7) アルチン (Altun) 5,798m
 1. 秘峰アルチン山 (秋田魁新報社) 1989年12月
2,300円

雲南省登山の和文参考資料一覧

(1979年開放以後のもの)

- 1) ユイロン (Yulong) 5,596m
 1. 雲南の山旅－遥かな頂－ 「ヒマラヤ153号」
1984年8月号
 2. 玉龍雪山 (飛田和夫) 「山と溪谷579号」1984
年10月号
 3. 雲南の山旅 玉龍雪山1984年 (H A J 雲南登
山隊) 「日本ヒマラヤ協会年報Ⅲ」昭和61年
9月15日
 4. 玉龍雪山登頂 (エリック・パールマン)
「岩と雪129号」1988年8月号
 5. 中国東南部玉龍雪山と麓の村「麗江」(青柳
健二) 「山と溪谷663号」1990年
- 2) メーリーシュエション (Moirigkawagarbo)
6,740m
 1. 京大学士山岳会隊の中国・梅里雪山遭難
「岳人525号」1991年3月号
 2. 中国、梅里雪山で遭難 (ヤマケイ・ジャーナ
ル) 「山と溪谷669号」1991/4
 3. 梅里雪山に消えた17人 (斉藤清明) 「山と溪
谷679号」1992年2月号
 4. 梅里雪山峰の登攀と遭難 (酒井敏明) 「山
岳第86年」日本山岳会 1992年
 5. 梅里雪山事故調査報告書 京大学士山岳
会 1992年1月
 6. 日中合同梅里雪山学術登山報告書 京大学
士山岳会 1992年10月
 7. 日中友好梅里雪山峰合同学術登山隊 1996年
記録「時報No.13」京大学士山岳会 1998
年11月
 8. 梅里雪山巡礼路一周の旅上・中・下 「岳人598
号～600号」(中村保) 1997年4月号～6月号
- 3) その他
 1. チベットとその周辺の少数民族 (山森欣一)
納西族・イ族・白族 「ヒマラヤ187号～188号、
190号」1987年6、7、9
 2. 雲南省・悠江 (サルウィン河) の旅 (中村保)
「ヒマラヤ236号」1991年7月
 3. 三たび中国、雲南省へ 梅里雪山から東チベッ
トをうかがう (中村保) 「ヒマラヤ267号」19
94年2月号
 4. 横断山脈の未踏の山々 (中村保) 「岳人597号」
1997年3月号

■ 寸 感 ■

今年H A Jが送り出した3隊の登山隊の殿、チベット連続登頂隊からの朗報が届いた。ナムナニ新ルートから3名登頂。隣接する未踏峰にも5名が初登頂した。詳細は次号で報告する事になる。

H A Jの実務を担当している者のほとんどが現役で登山をしている者達だ。その不在を間を埋める身としては、正直歯がゆい思いがある。その実働部隊を支える、数多くの会員の存在なくしてはH A Jは成り立ってゆかない、ただ感謝あるのみ。華甲忘年会でお会いしましょう。(中川)

2ヶ月間事務局の留守をあずかったものの、その大半は「探し物」と問い合わせへの対応に費された。改めて日常における整理整頓が如何に大切か、思い知らされた。もっともこれは、仕事量の多さの割に専従が一人しかいないことも原因だ。

年が明けると研究会や研修会が目白押しとなり忙しさに拍車がかかる。近郊の会員の皆さん、たまには遊びがてらお手伝いに来局してみませんか。遠くて……と思っている皆さん、「ヒマラヤ」掲

載の原稿をお寄せ下さい。そして何より「会費は滞納しないよう」お願いします。(寺沢)

事務局日誌 (10月)

- 9日(土) ヒマラヤNo.336号発送
25日(月) 東京集会(20名)
28日(木) チベット連続登頂隊、グナラ峰初登頂、ナムナニ東壁初登攀の報入る。

ヒマラヤ No.337 (12月号)

平成11年11月10日印刷 11年12月1日発行
発行人 山森欣一
編集人 山森欣一
発行所 日本ヒマラヤ協会
〒170-0013 東京都豊島区東池袋4-2-7
萬栄ビル501号
電話 03-3988-8474
郵便振替 00100-6-48954「日本ヒマラヤ協会」



高山病対策の必携品

ガモフバッグとパルスオキシメーターのレンタル開始!

加圧しただけで約2000m下山したのと同じ環境を作るガモフバッグ、高山病診断、予防のためのパルスオキシメーター。高所を目指すあなたをそろって力強くサポートします。

- ガモフバッグ(携帯用高压バッグ/総重量6.7kg)
- パルスオキシメーター
(血中酸素飽和度測定装置/重量380g/単3乾電池4本使用/携帯型)

総代理店 : 日本メディコ株式会社

レンタル・販売問い合わせ先 : 株式会社 ティ・エッチ・アイ

〒135 東京都江東区木場2-5-7 KHビル7階
TEL : 03-5245-0511 FAX : 03-5245-0510
(隊荷の輸送、航空券の手配などもお任せください。)

TREASURE TOUR



EXPEDITION & TREKKING

自分の旅だから、自分でつくる。そんなあなたを応援いたします。

—— 遠征隊、トレッキング、秘境への旅 ——

あらゆる申請・許可取得、現地手配、航空券、山岳保険など、
お客様のご要望に遠征経験豊富なスタッフがお答えします。



マウンテントラベル株式会社

〒105 東京都港区新橋3-26-3 会計ビル4F

☎03-3574-8880

三井航空サービス代理店2452号

遙かなる高みへ



Royal Nepal Airlines

The way to Nepal ロイヤル・ネパール航空旅客代理店



SINCE 10th Dec. 1973
株式会社 西遊旅行

25 years with
exciting countries

SAIYU TRAVEL CO., LTD.

トレッキング・登山隊の許可取得から航空券・現地手配までお引き受けいたします
～ネパール・インド・ブータン・パキスタン・中国・東南アジア・アフリカ・中南米～

トレッキング・海外登山・シルクロード・
秘境旅行のパイオニア



株式会社 西遊旅行

運輸大臣登録旅行業第607号・日本旅行業協会正会員

■本 社 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-3-1
岩波書店アネックス5階
☎03(3237)1391(代) FAX 03(3237)1396
■大阪営業所 〒530-0026 大阪市北区神山町6-4 北川ビル5階
☎06(6367)1391(代) FAX 06(6367)1966
■カトマンズ連絡事務所 (JAI HIMAL TREKKING/SAIYU TRAVEL)
P.O. BOX 3017, Durbar Marg, KATHMANDU, NEPAL
☎221707, 224248

●格安航空券はこちらに!



キャラバンデスク

キャラバンデスク東京(住所:本社内) ☎03(3237)8384(代) FAX 03(3237)0638
キャラバンデスク大阪(住所:大阪営業所内) ☎06(6362)6060(代) FAX 06(6367)1966

◆パンフレット請求や個人旅行のお申し込みは
フリーダイヤル をご利用下さい
(通話料無料)

☎0120-811395

西遊旅行ホームページ (<http://www.gol.com/saiyu/>)

ヒマラヤへの装備

●遠征隊の装備、相談にのります。



Mt. EXPEDITION SHOP ICI ISHII SPORTS

- 登山本店/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3208)6601代
- スキー&カヌー本店/〒169 東京都新宿区大久保2-18-10 ☎03(3209)5547代
- 新宿西口店/〒160 東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(3346)0301代
- 新宿南口店/〒151 東京都渋谷区代々木1-58-4 ☎03(5350)0561
- 神田登山店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-8 ☎03(3295)0622
- 神田店/〒101 東京都千代田区神田神保町1-4 ☎03(3295)3215
- 神田ウェアー館/〒101 東京都千代田区神田神保町1-6-1 ☎03(3295)6060
- 八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-12 ☎0426(46)5211
- アネックス八王子店/〒192 東京都八王子市横山町3-6 ☎0426(46)3922
- 川越店/〒350 埼玉県川越市南通町14番4 ☎0492(26)6751
- 大宮店/〒330 埼玉県大宮市宮町2-123 ☎048(641)5707
- 高崎店/〒370 群馬県高崎市新町5-3 ☎0273(27)2397
- 松本店/〒390 長野県松本市中央2-4-3 ☎0263(36)3039
- 新潟店/〒950 新潟県新潟市東大通2-5-1 ☎025(243)6330

- 新潟ブライカ店/〒950 新潟県新潟市天神1-1 ブライカ3 B1 ☎025(240)2316
- 仙台店/〒980 宮城県仙台市宮城野区榴岡4-1-8 ☎022(297)2442
- 盛岡大通店/〒020 岩手県盛岡市大通1-10-16 ☎0196(26)2122
- 札幌店/〒060 札幌市中央区南二条西4-8 ☎011(222)3535
- ルート36真栄店/〒004 札幌市豊平区真栄一条2-13-2 ☎011(883)4477
- 北十二条店/〒001 札幌市北区北十二条西3-5 ☎011(747)3062
- 2番街店/〒060 札幌市中央区南二条西1-5 ☎011(219)1413
- 旭川店/〒070 旭川市六条通8-37-2 ☎0166(24)5300
- 外商部(メールオーダー)/〒169 東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(3200)7219



ICI 石井スポーツ

事務所/〒169 東京都新宿区百人町1-4-15 ☎03-3200-1004